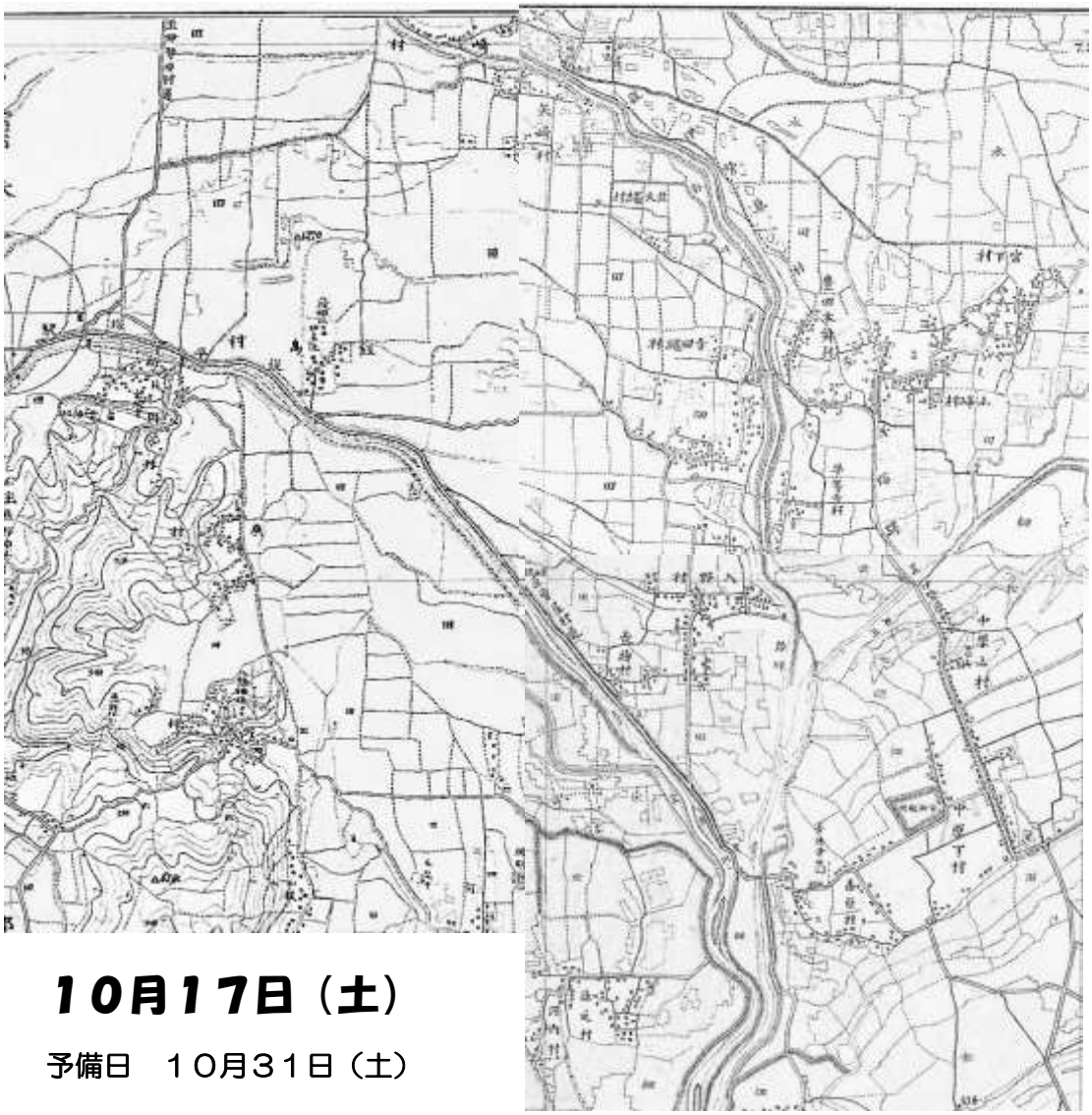
第１回　金田ヘルシーウォーク＋プラス

公民館 ➡ 新霞橋 ➡ 纏緑道（控え土手）➡ 金目川堰 ➡
明珠院 ➡ 飯島控え土手 ➡ 古川排水路 ➡ あさつゆ広場
公民館（12 時半頃）　　＊　あさつゆ広場（自由解散）



10月17日（土）

予備日　１０月３１日（土）

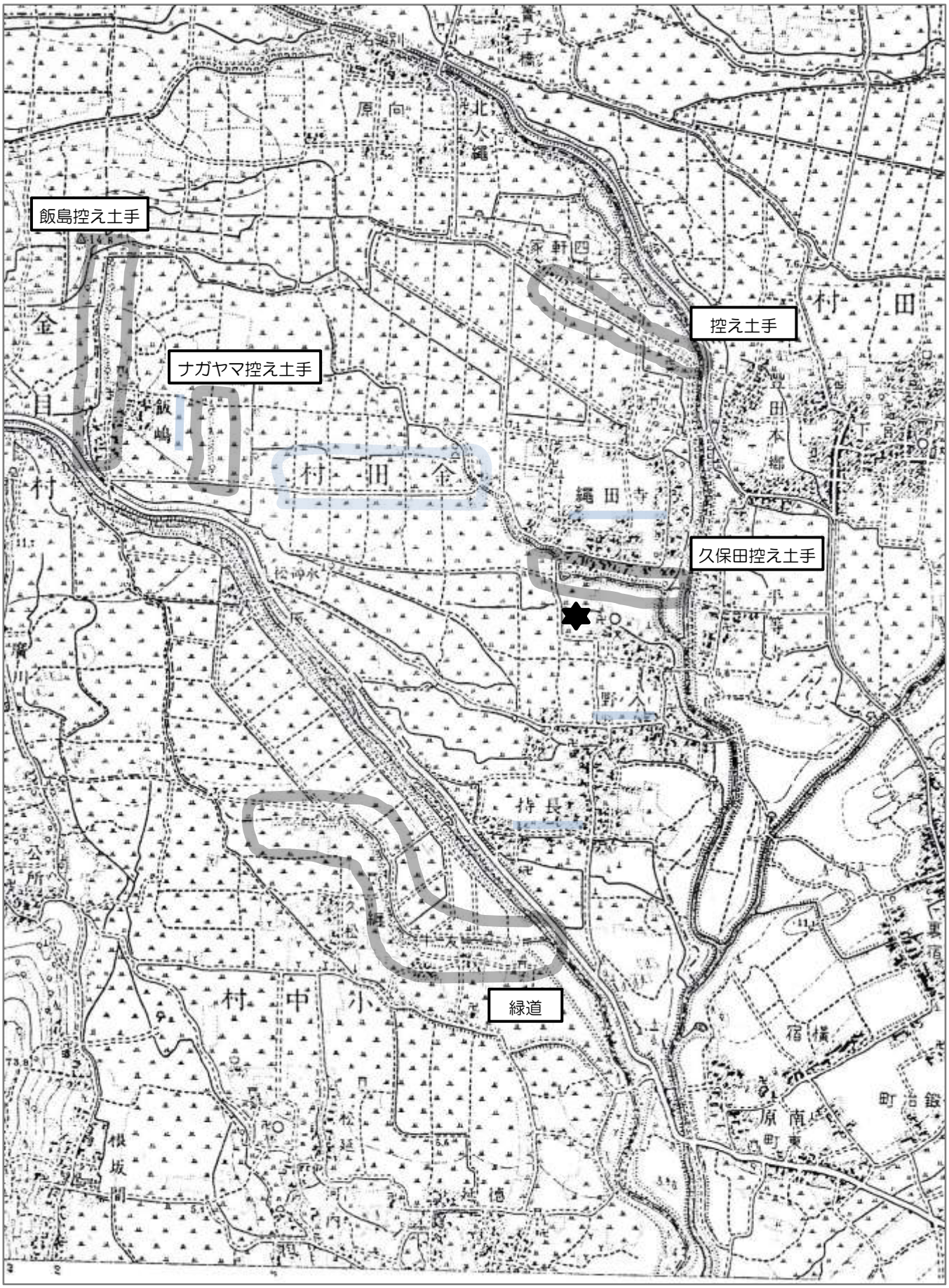
金田公民館・ 地域史研究会　共催

講師：前館長　片山　興大

＜明治 15 年　陸軍参謀本部　フランス式彩色地図＞

① 明治３９年　地形図　金田地区

現在の公民館



②　金目川の筋替え（堀替え・流路の変更）

- １７０３（元禄１６）年１１月：元禄関東地震
  川瀬が高くなり、降水量が増えると、金目川の水があふれ、洪水を繰り返した。

- １７０４（宝永元）年６月：金目川満水

- １７０５（宝永２）年６月：金目川満水

乍恐口上書を以奉願候御事

「相州金目大堤幷川通所々堤之儀、・・・」

「所々堤押切百姓家居迄水押上、殊夜半儀有故農具等押流、雑穀くさらかし、其上田地石砂入、又者水腐ニ而当分ゟ及渇命申候、・・・」

「此村々所々堤下ニ御座候故、何連之堤押切申候而も田畑損仕候、何とそ此度川通り所々堤、丈夫ニ御普請被仰付被下候様ニ奉願候、」

「右之堤年々川幅せまく御座候、御見分之上、水当り之所川幅御広ク被遊被下候様ニ奉願候、地震以来川瀬大分高罷成、少シ之水ニも堤押切申候」

＜平塚市史４　村と水利　金目川＞

- １７０６（宝永３）年２月　金目川筋替え　・・・　幕府による改修（御普請）
  入野、長持、南原村の間をほぼ直線的に長８３０間（１４９４ｍ）余、川幅５０～２５、６間（９０～２４ｍ）余りに掘り替えるもので、現在の流路となっています。

入野村：　「金目川　村西ヲ流ル（幅二十五間）昔ハ村ノ中程ヲ　斜ニ疏通シ　巽方ニテ　鈴川ニ合セシガ　屡水溢セシヲ以テ　宝永三年　命アリテ　今ノ如ク堀替レリ」

＜風土記稿＞

- １７０７（宝永４）年　１１月２３日　富士山噴火（宝永の噴火）
  火山灰は砂降りと表現されるように、田畑、家屋にも降り積もり、北金目地域では23～26ｃｍほどの火山灰が積もったという記録があります。

農業用水路や金目川を流れた火山灰は、川底に堆積し排水が悪くなり「田畑の儀は申すに及ばず、百姓居家迄常々水湛え、住居なり難く」なる状況になりました。

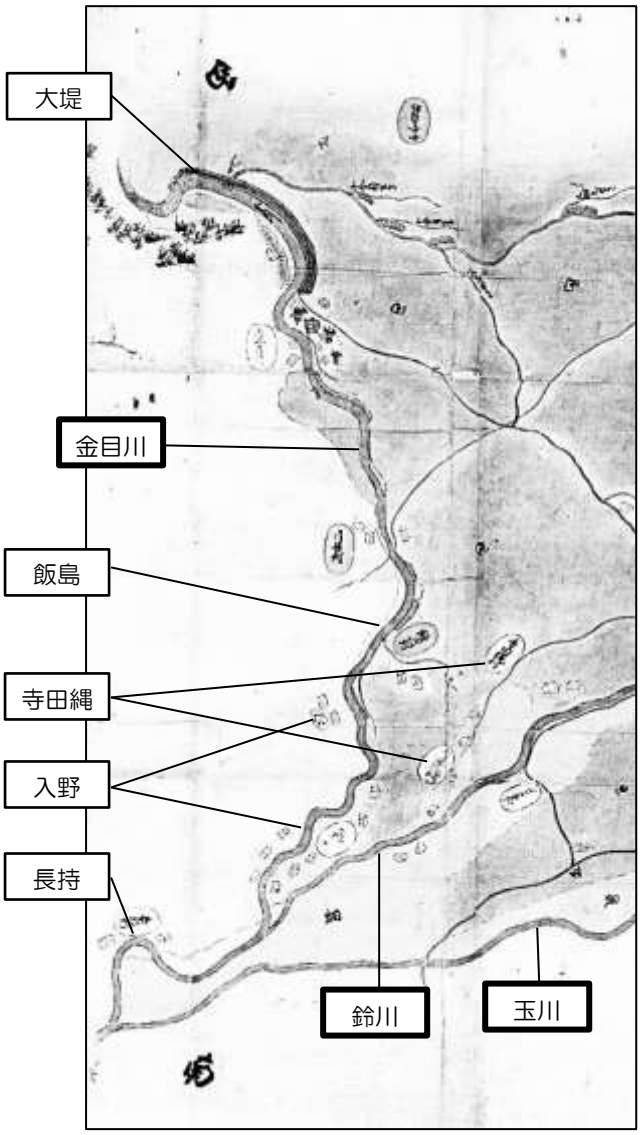
金目川、鈴川、玉川に降った火山灰（砂降り）が合流点に堆積し、ダム状になり水が溜まり、入野、長持、豊田本郷、小嶺、宮下、平等寺、打間木の７ヶ村の田畑・家屋が浸水し、往来に船を使わねばならない状態になりました。

幕府は、諸河川の川渫いや金目川、玉川の筋替えを実施し、現在の川筋が完成しました。

＜金目川の博物誌、平塚学入門　「玉川の筋替え」・改＞

③　金目川　筋替え前の流れ

・　「１６８４（貞享元年）金目川通堤川除普請裁許絵図の部分」図



幕府から金目川の堤防修復を命ぜられ、人足を出した 24 ヶ村と拒否した下島・打間木・城所・小鍋島 ４ ヶ村の裁判に使われた絵図。裁定により ４ ヶ村は金目川の水を用水として利用していることが判明し、人足を出すことになりました。裁定に使われた絵図です。

・　金目川の筋替えが行われる前の絵図です。
　金目川は、鈴川と合流し、後に玉川（渋田川）と合流しています。

・　大堤の堤防は強固に描かれ、決壊の多い個所であったことが分かります。（秦野県道の鶴巻への分岐付近）

・　金目川の流れがくねくねと曲がって（曲流）います。

・　金目川が入野の集落を二分するように流れています。長持は右岸。

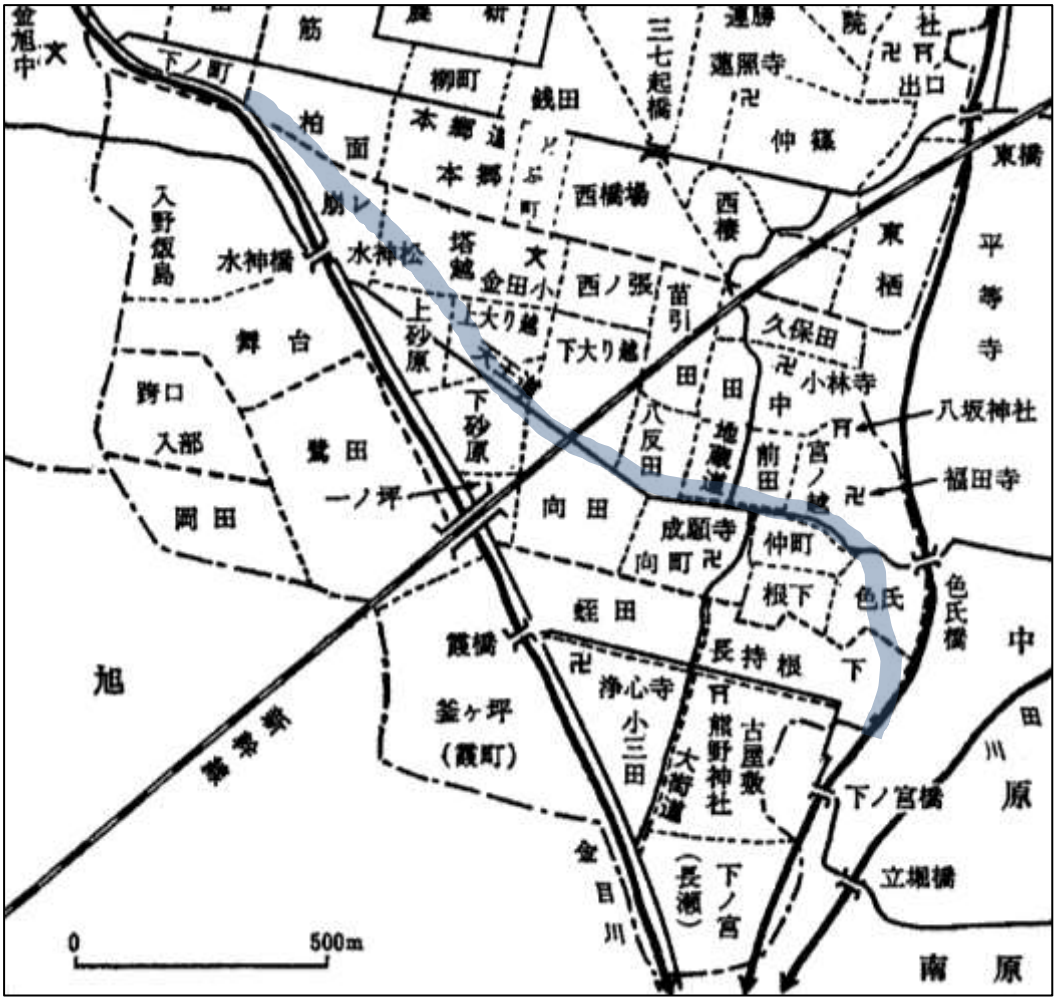
・　不鮮明ですが、金目川の左岸、飯島と入野飯島の一部に堤防が描かれています。（堤防は限られた場所に築かれていたようです）

・　当時の流れは平地を削り（浸食）流れていました。

・　現在、金目川は全面的に堤防で守られ、川底は平地より高い天井川として掘り替えられました。

＜「ひらつかの村絵図を読む」平塚市博物館・改＞

④　金目川の筋替え前の旧河道を考える　（金田地区の字名）



- 水神橋の上流、通称オオマガリの北付近から天王道（八坂神社の旧名、牛頭天王社に因む）を抜け、宮ノ下橋付近で鈴川に合流していました。
- 水神さんが祀られ、字名にある上・下砂原、塔越、大リ越等の字名に古い金目川の名残があると云われています。
- 字名の「崩レ」は災害を意味し、付近に水神さんを祀っているのは、金目川の決壊場所を示しているようです。天王道が旧河道と指摘されていますが、古い川の流れに沿う金目川の慣性が想起されます。
- 金目川と鈴川の合流点付近に「古屋敷」という字名があります。むかし集落がありましたが、鈴川が氾濫するので、300 年ほど前、土地の高い西の方に移転したといわれています。　金目川と鈴川の合流点であったと思われます。

⑤　控え土手　（洪水から集落・田畑を守るため、平地に築かれた水防の土手）

○　長持と纏　（纏の緑道）　＜　改修後、現在は散歩道　＞

「金目川控堤飛地ニ有之当村ら卯（東）ノ方ニ当リ申候

敷　六間（１０．８m）、　馬踏　八尺（２．４m）、　高　九尺（２．７m）

長　弐百八拾六間（５１７．６m）ニ御座候」

＜「松延村地誌取調書上帳」天保五年（１８３４）　平塚市史３＞

○　飯島　＜　大部分が現存　＞

○　飯島と寺田縄境　　＜　ナガヤマ　＞

規模などの記録がありません。耕地整理の時に消滅したそうです。

○　寺田縄と入野境　　＜　字久保田水控堤　＞

敷　三間（５．４m）、 馬踏　六尺（１．８m）、 高　五尺（１．５m）

長　弐百三拾五間　（４２５．４m）

「控堤居村際ニ有之低地ニ而、満水之節者水甚、種穀夫食迚水冠而難渋仕候」

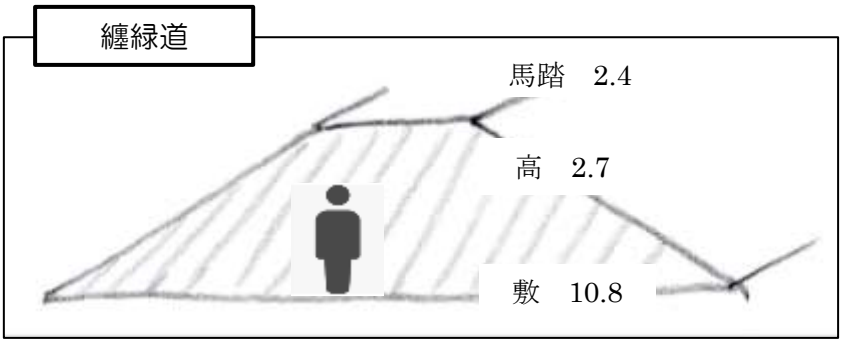
＜相模国大住郡入野村明細帳＞

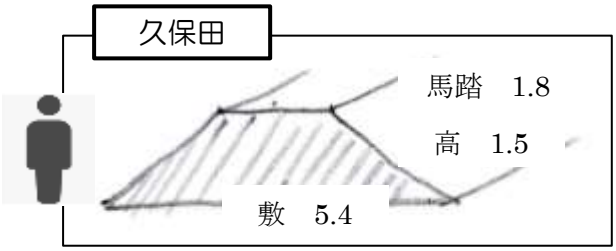
○　寺田縄と岡崎境

明治期　金田村村長吉川氏　構築

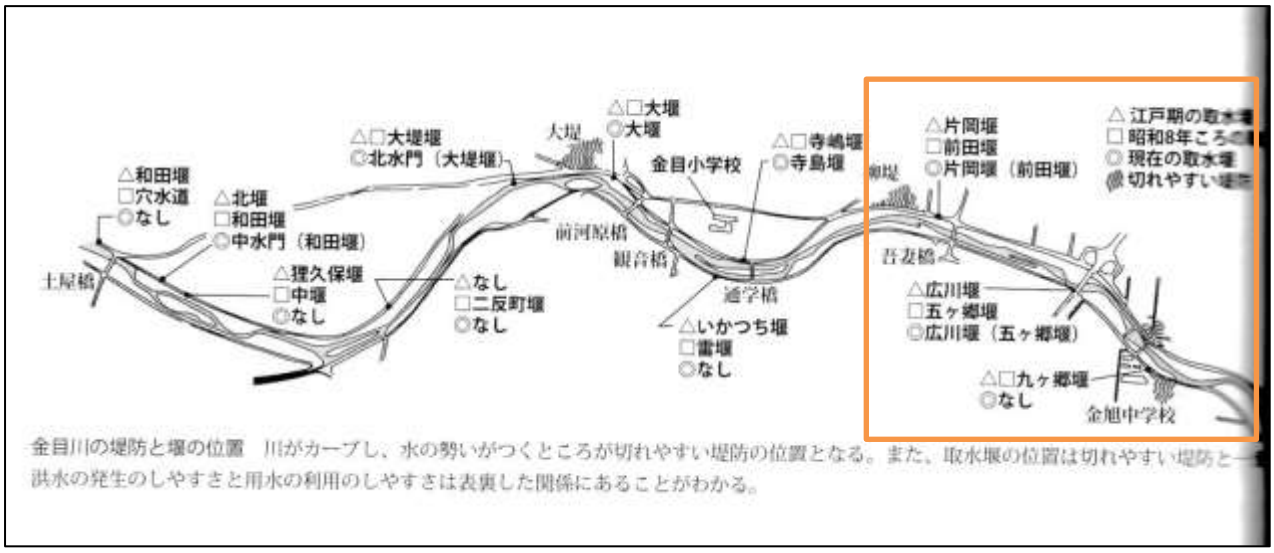
○　控え土手　断面略図　　＜　纏緑道、　久保田　＞　（単位　m）

土手の規模は洪水の規模に比例するのでしょう。

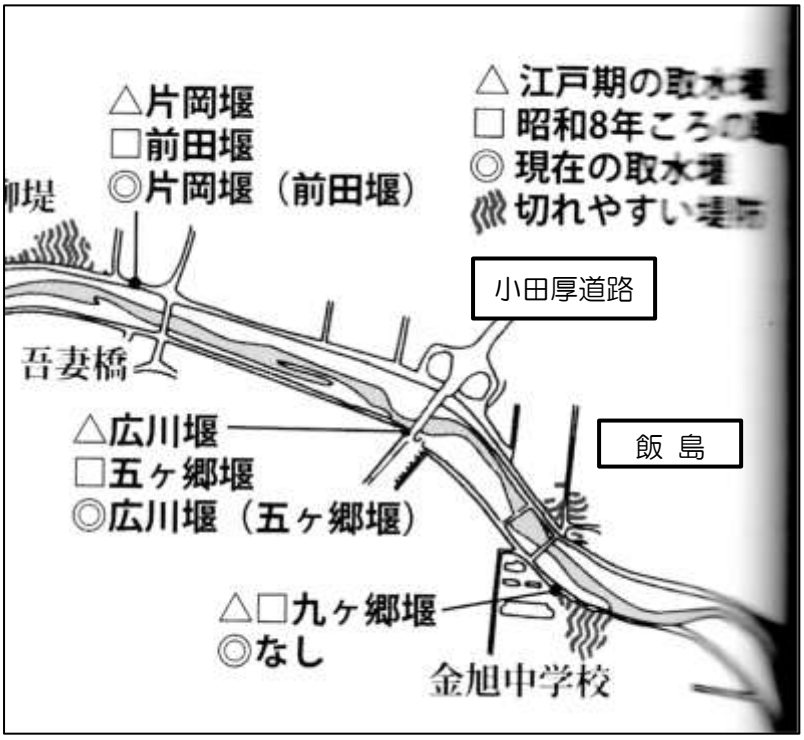




⑥　金目川の堤防と堰の位置



＜平塚市博物館　「平塚学入門」　２０１９年　夏期特別展＞



○　金目川の切れやすい堤防

- 金目川の左岸　飯島地域は、金目川の筋替えが完成した後も破堤が繰り返された。
　洪水発生の危険な個所で飯島集落の西側に控え土手を作り、飯島の集落を初め金田地区を洪水の危険から守る役割を果たしました。

- 現在の金旭中の標高は、１５．１ｍあります。この付近が破堤し洪水になることは、より低い旭地域の集落や水田にとって甚大な被害をもたらしてきました。

　規模の大きな纏緑道の控え土手の役割は、当地にとって、洪水から生活を守る、重要な意味を持っていました。

⑦　金目川堰（飯島堰）　・・・　金目川用水改良事業

・　「金目川からの取水量を安定させるため、土地改良事業として飯島堰（金目川堰）が建設された。建設には地元の人達が動員され、賃金はなく全くの勤労奉仕だった。「でぶそく」を取るほど地域の農家にとっては重要な作業だった。工事には金目川の砂利を使い、我々は、砂利運びをした。

堤防のコンクリートの下には「やいた」を川幅に埋め、金目川の伏流水を活用する。これにより、毎年、水が確実に確保できる。

初めの計画では、もっと上流の片岡に建設される計画だったが、上流ではこれ以上の水は必要ではないということで、今の場所に落ち着いた。堰の建設以来、上流との水をめぐる対立もなく、平塚市の行政上の関与もあり、灌漑用水として金目川の水が恒常的活用されている」

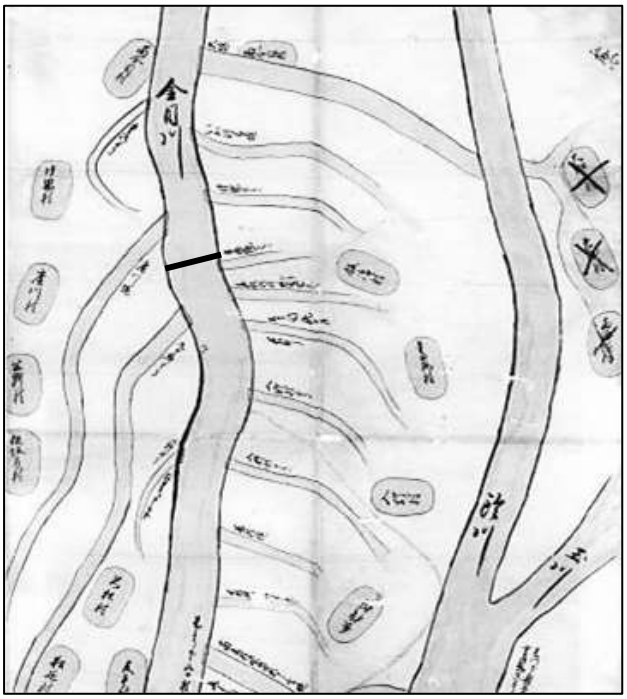
＜地元氏　談話＞

・　「金目川堰により、金目川の左岸にあたる、金田村の大半が灌漑され、右岸への通水は、金目川の川底を貫通させるサイフォンを通し、金田村の一部と旭村を灌漑しています。完成後は下流域の数ヶ所の堰（水田への用水の取水口）は閉じられました。

総事業費は２２，０００，０００円にして、昭和２６・２７年の２ヶ年にわたり県営にて施行するものとする」

「実施後の用水は豊富になり、反当り０．２石余の増収となり、毎年の維持管理に要した費用・労力は軽減され他の生産に向けられる等その利益は多大である」

＜中郡金田村「昭和２６（１９５１）年金田村勢要覧」・改＞



○　金目川堰　（━━）築造前の堰

＜江戸時代・筋替え以降＞

○　右岸

- 九ヶ郷セキ
- 入野村分何セキと申し候哉

○　左岸

- 寺田縄セキ
- 飯島村セキ候哉
- 寺田縄セキ
- 入野村セキ
- 入野新セキ
- 長持セキ
- 長持村口何と申候哉

＜「金目川通り堤位置図」市博物館＞